

第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

生命保険が支える家族の幸せ

愛知県 滝中学校 一学年

室峰 千帆里

「お父さんって、生命保険に入っているの？」と聞いてみた。

「ああ、入っているよ。」

と父はそつげなく言った。何で生命保険に加入しているのか聞いてみたところ、父が新入社員の頃、職場で生命保険に加入することをすすめられたので、あまり考えずに入ったのだという。

「何となく入ったの？」

私はがっかりしてしまった。

「でもね、いずれ結婚もするだろうし、子どももできるだろう。何となくだけど、将来を考えて入ったんだよ。でも最近の若者は、生命保険に加入していない人も結構いるみたいだ。」

と父。そこで私は思わず聞いた。

「生命保険って加入しても、しなくてもどっちでもいいの？お父さんは加入してどうだったの？」

「民間の制度だから、加入は任意だよ。」

と父は教えてくれた。そして、

「入っていて良かったかな。結婚もできたし、こうして二人の娘もできたし。騒がしい娘だけど。」

と言った。最後の一言は余分だ。

父は続けた。

「死亡保障は自分のためじゃないんだよな。死んでしまえば、死んだ本人は保険金をもらえないし、もらっても使えない。でもお父さんが死ぬと、おまえたち娘二人の面倒をみるのができないから、せめてお金を残しておきたいよね。これからまだまだ学費もかかるしね。家族のための生命保険だな。」

確かにそうだ。言われてみれば、父の生命保険は父のために入っているのではない。私たち家族のためなんだと思うと、ちよつとほろりとした。父は、

「お母さんはたくましいから、保険金がなくても大丈夫だけどね。」

と余計な一言を付け加えた。洗濯物をたたんでいた母がこれに反応した。

「何言ってるの！あなたのための生命保険でもあるじゃない。忘れたの？去年の運動会。」

去年の運動会：そうだ、父は去年の運動会の親子綱引きで頑張りすぎて腰を痛めたのだ。治療のために通院していたが、そのときにも給付金が出たと言っていた。父はばつが悪そうな顔をしている。母は、

「お父さんだけじゃないわ。まゆちゃんもドッジボールで突き指したときにお医者さんに行っているけど、そのときにも給付金がでたわよ。」
とも言う。

私も部活でバスケットをやっているが、ケガや熱中症は心配だ。私の身の回りにも保険は関係しているのだ。妹が話に加わる。

「いろいろなときにももらえるなら、使わないと損だね。」
私は疑問に思った。

「でも、そんないろいろなお金ももらえる保険なら、保険料は高くないの？」

父が解説してくれた。

「確かになんでもかんでも保障してもらおうと保険料は高くなる。でも必要な保障はそのときどきによっても違うからさ。おまえたち娘二人が就職すれば、自分で生活できるから、お父さんは死んでも問題ないだろ。」

「えー、お父さん、死なないで」
妹が慌てている。

「子供が独立した後は私たちの介護ね。」
と母。再び父が言った。

「さっきまゆちゃんは、保険は使わないと損と言ったけど、使う必要がないということとは不幸がないということだから、それは幸せな事だと思うよ。使わなかった分が他の人を支えている事になるし。」

「ふーん、そうか。」
久しぶりに父のうんちくに感心した。

それぞれの家族の生活があり、それに合った保険が家族を支えている。保険が家族の幸せを支えている。